

『月夕のヨル』

著：朝丘 辰

ill：yoco

もう二度と会えない、大好きだった人の名前をネットで検索したのは一ヶ月前だった。

【せいや、ゲイ】と入力したのは、ノンケだった彼に再会したくなかったからかもしれない。宇宙みたいに茫洋と、茫漠と、広大で未知なネット世界に、ゲイの聖也さんがひそんでいたらしいのにと思った。

聖也さんはこの世にひとりで、そしてすでになくて、それが現実だとわかっていたのに。

「——いらっしゃい」

『食事処あずま』とするされた濃紺色ののれんをくぐって戸をスライドさせ、お店へ入ると、店主の男性がカウンターにいて、軽く会釈しながら笑顔で迎えてくれた。……座席は、右側に掘りごたつ式小あがり四人用卓がみっつと、カウンターのみ。まだほかに客は誰もいない。

「よろしければ、こちらへどうぞ」

ぼくの迷いを察してか、店主が笑顔で正面のカウンター席へくるよううながしてくれた。

耳が隠れるほどのすこし長めのうねった焦げ茶髪と、夏の太陽みたいに爽やかな笑顔。ブログの記事に載っていた写真より、現実の、リアルの彼は、上背もあって綺麗な手をした格好いい男だった。

「……もしかして、きみがヨル君？」

席へつくと、彼がおしぼりとお通しをくれながら訊ねてきた。

ヨル君——ネットでつかっている名前を、他人の声で聞くのはなんて奇妙な感覚だろう。

「はい、ヨルです」

顔をあげて、ぼくも彼の目を見つめた。

「あなたは、セイヤさんですか」

この名前の響きを口にしたのも、ずいぶんひさしぶりかもしれない。

「そうです。セイヤですよ」

彼はにっこりと、清らかな瞳でこたえてくれた。

聖也さんの名前をネットの海で検索した結果、表示された膨大な情報のなかからながれ着いたのが、このお店のブログだった。

家族と暮らしている家のある町から電車とバスを利用して一時間以内に着くその食事処は、昼は定食屋、夜は居酒屋になるお店で、店主のセイヤさんが宣伝のためにブログを書いている。“ゲイ”というキーワードでひっかかったのは、彼のブログ記事にゲイのお客さんも登場するからだ。彼は許可をくれたお客さんとの会話内容や面白い出来事を日記のように綴っており、それは

さながら短編小説のようで、さまざまな人生を生きるお客さんと交流し、彼が日々思いを馳せる事柄は読み応えもあって、単なるお店の宣伝ブログにしておくのはもったいないほどだった。ぼくはそこに惹かれて、気づけば毎日更新を楽しみにする愛読者になっていた。

「ヨル君は、食べ物好き嫌いとかある？」

「……いえ。なんでも食べます」

「お酒は？」

「飲みやすいサワーとかカクテルなら、すこし」

「わかった。じゃあ適当にごちそうするね」

骨と筋のおうとつが美しい長い指に、酒の入ったグラスと二等分にされたレモンが運ばれてきた。レモン搾り器もある。自分で搾って作るこのレモンサワーは、ブログでもお客さんに好評と書かれていて、一度呑んでみたかった。レモンを手を持つ。

「ヨル君は大学生なんだっけ」

「あ……はい」

「友だちと呑みにいったりする？」

「いきますけど……合コンしたりなんざりっていう、はしゃいだ大学生のイメージほどじゃ、ありません。友だち数人と安いチェーン居酒屋へいく程度で」

「みたいだね。レモンの搾りかたが初々しい」

手もとでレモンの果実がいびつなかたちに破壊されて、飛び散った果汁も指にべったりついている。

「ははは」とセイヤさんが顔をそむけて笑った。眉を八の字にして、左手で口もとを押さえて肩を揺らすチャーミングな姿を見ていると、恥ずかしくて、いたたまれなくなってくる。

「貸してごらん」

搾り器とレモンをとった彼が、突起部分に果実をまっすぐあわせて押しこみ、回転させて、鮮やかに搾ってくれた。不自由そうなくらい長細く綺麗な指で、きっちり搾りきって果汁がでなくなると、それをそっとグラスにそそいでレモンサワーにしてくれる。

「空きっ腹にいきなり酒を入れるとよくないから、お通しと一緒にどうぞ。うちの自慢の肉じゃがもいまだすね」

「……ありがとうございます」

おしぼりで手を拭い、箸を割る。

お通しはほうれん草のおひたしだった。食べてみると、出汁と醤油の味がしっかり染みこんでいるのに、濃すぎず水っぽくもなく、ちょうどいい旨味が口内にひろがっておいしかった。器にこびりついたかつお節まで残さず食べた。さっぱりしたレモンサワーにとてもあう。

「すごくおいしいです」

お通しでさえ常連さんに人気、とブログにあったとおりの期待を裏切らない味。

「どうも。肉じゃがも、はいどうぞ」

じゃがいもが焦げ茶色になるほど煮こまれた肉じゃがは、ニンジンのオレンジ色と絹さやの緑色が彩りも綺麗で食欲をそそる。じゃがいもの角を崩してひとくち食べたら、ほっくり温かい甘

みと、コクのある出汁が舌に染み入ってこれもたまたまなくおいしかった。

「おいしいです……奥までしっかり味がついてる。このじゃがいもだけでも延々と食べていられそう」

「お気に召したようでよかった」

終始にこやかで、穏やかな雰囲気をもとって正面にいる彼を見あげた。

ブログのやわらかい文章とおなじ温厚で人情味を感じる人柄、黒いYシャツにエプロン、布巾を持つ綺麗な手。

「やっぱり実際に会ってみると違うものだね」

彼が言った。

「しゃべった感じはチャットのままでけど、声や容姿やしぐさに新鮮さを感じるよ」

肉じゃがに視線を落として、うつむきながら「……はい」とうなずいた。

「セイヤさんも、想像以上に格好よくて……穏和な人でした」

「ふふ、怖い人だと思ってた？」

「ブログで素敵な人だとは思ってました。でも……正直、会おうって言ってもらったときは、得体の知れない人だになって、身がまえしました」

「ははは」

彼のブログは『アニマルパーク』通称『アニパー』という、動物のアバターで交流するSNSをつくった会社が無料で提供しているもので、そのブログに『アニパー』のブログパーツも埋めこまれていた。彼が『アニパー』にログインしていると、ブログの隅に表示された可愛い動物アバターの上に、吹きだしで“ログイン中”とでるようになっていたのだ。

『アニパー』に登録すれば、一ヶ月のあいだブログの日記だけ見守っていた彼と会話できる。

次第に“ログイン中”の表示を見るたびに胸が騒ぐようになった。“オフライン”になっているとも悲しい気持ちにもなった。

それで思いきって登録して、ログイン中のブログパーツから“セイヤさんのところへいく”というアイコンを押し、会いにいったのが一週間前。ちなみにアバターでの彼はまるい可愛い目をした水色ライオン。ぼくはつぶらな黒い目の、白いぼろぼろハムスター。

「『アニパー』はもともと客寄せと予約の受けつけをメインに利用してるからね。ブログ経由でいきなり声をかけられても驚かないし、ぜひいらしてくださいって店へ誘ったりもするよ」

「……でも、ぼくは、」

決して純粋な、店に対する興味だけで近づいたわけじゃなかった。

「そうだね」と、ぼくの言い淀んだ言葉を酌むように、彼がうなずく。

「悩んでいるのは叔父さんのことなんだっけ」

「はい」

こたえた自分の声に気持ちが凧いだ。

「……すみません。トマトのまるごと煮と、味噌お粥と、生野菜もお願いしていいですか」

目をあげて唐突に注文したぼくを、それでも彼は唇を甘くひいて苦笑するだけで「わかりました」と受け容れてくれる。ぼくから視線をはずし、食事を用意する表情が真剣で、料理人の風格

を感じる。

「カウンターに立っていると、毎日いろんな人と出会うよ。単身赴任で不倫してるサラリーマン、男にふられるたび号泣しにくる風俗嬢、家族に内緒で夜中こっそりお酒を呑みにくる主婦……みんなそれぞれいろんな物語の人生を生きてる」

「……はい」

「ぼくがブログを書くようになってからは、自ら鬱憤や苦悩を吐露するためにきてくれる人も増えた。ここは近ごろそういう場所になってきているんだと思う。ヨル君も、好みにあわせて利用してくれてかまわないよ」

「好み、ですか」

「そう」

抱えている事情を赤裸々に暴露するのも、ひとりでゆっくり食事して帰るのも、自由にしなさいという意味だろうか。

「……セイヤさんは、優しいんですね」

「さあ、どうでしょう」

今度は小首を傾げてにっこりと、夜にだけ咲く花みたいに白く無垢に微笑む。

カウンターにならぶ大皿の料理の芳しい香りが、店内にあわあわただよっている。空気だけでも、食欲と、胸の奥を満たしてくれる店……ぼくはここに、癒やしを求めてきたんだ、と、自分の意思を確認するように感情を噛みしめた。

「叔父が亡くなったのは、三年前の、二月のことです」

「うん」

「父の弟で、まだ三十九歳でした。車の事故で、一瞬で。……泣き崩れました。相手のトラックの運転手を殺してやるって、号泣して叫び狂いました。最後に見た棺のなかの姿と、火葬炉に運ばれていく場面が、頭にずっとこびりついています」

「……うん」

「でも近くに住んでいたのに、あまり会えない人だったせいか、時が経つにつれ、死の実感がうすれて行って、またひょっこり顔を見せにきてくれるような、どこかで生きているような気がして、なのにあの人はこなくて……それでネットで探したら、このお店のブログにたどり着きました。空虚だった毎日が、セイヤさんの日記を読むっていう習慣を得たことで変わって、癒やされていったんです」

「……ん」

手もとにレモンサワーがある。ひと息にしゃべって掠れた喉を潤したくて、グラスをとってゆっくり呑んだ。……おいしい。さっぱりとすっぱくて、おいしい。

「ぼくは叔父が好きでした。……恋をしていました。初恋でした」

聖也さんが好きだ、と怒鳴るように告白したときの、驚いてこぼれ落ちそうに瞠目した彼の瞳が脳裏を過る。何度思い返したか知れない、いつも記憶の真んなかにある鮮明な姿。

「恋を自覚した当時ぼくは十四歳で、叔父はぼくの告白を笑いました。でも二十歳になっても自分を好きだったらつきあってやるって、約束してくれたんです。そして、ぼくが二十歳になる前

に死んでしまった」

「ン」

「あの約束がどこまで本気だったのかも、もうわからない。三年経ったのに、たぶん、ぼくはまだ叔父に囚われているんだと思います」

グラスのなかの氷が、店内のライトに反射して銀色の光を放っている。うすくにごったレモンサワー。冷たいグラス。指先に水滴がついて冷えていく。

現実をしっかりと見つめて、確認して、ぼくは聖也さんとの思い出を迂闊にひっぱりださないようにしている。あふれでて制御できなくなると、自分は駄目になる、と知っているからだ。どんなふうに“駄目”になるのかはわからないのに、抑えろ、と本能が腹の底から訴えてくる。抑えろ、いまはまだ。

「チャットの文字だと淡々として見えただけ、実際はこんなふうに聞かせてくれてたんだね」

どうぞ、とセイヤさんがぼくの前にキャベツとニンジンとピーマンの生野菜盛りと、味噌お粥をおいてくれた。顔は、まださっきとおなじように微笑んでくれている。

彼の言う“こんなふう”が、どんなかは判然としないものの、「はい」とうなずいて返した。たしかに聖也さんの死についてもチャットで先に話していた。ハムスターの姿で、文字のみでかわす会話なら、初対面でも臆さずに披瀝できた。それまでブログをとおして見てきた彼に、信頼が芽生えていたのもある。この人だから話せた。

「考えかたのひとつとして、亡くなった人のことを想っていつまでも嘆いていたら、その故人が心配して天国へいけなくなってしまうという説もあるよね。見たところ、ヨル君は嘆くほどではないにしろ、ぼくには泣いているように感じるよ。……叔父さんの時間は残念ながらとまってしまった。けどきみの命の時計の針はすすみ続けている。叔父さんと過ごした日々やもらった感情の全部を胸に刻んで、叔父さんに恥ずかしくない人間へ成長していこうと、ヨル君が考えられるようになったらいいなと、ぼくは思うよ」

部外者なのに不躰だけれど、とひかえめにつけ加える。いえ、と頭をふって、瑞々しいキャベツを一枚とり、味噌ダレをつけてぱりぱり鳴らして食べた。

……ぼくは泣いて見えるのか。長いようでいて、またたく間に過ぎた三年のあいだ、ぼくはこういう言葉で、こうして、誰かに、叔父に恋したゲイの自分を許されたかったように思う。

「……セイヤさんは本当に優しいですね。ぼくがゲイってことも、驚かないし嗤わない」

「ヨル君は、驚いたり嗤われたりしてきたの？」

キツネ色をしたお粥が、ほくほく白い湯気をあげている。

「自分の指向は、叔父と、仲の深い幼なじみにしか話さなかったの、差別を体験したことはないです。でも、ふたりの次にセイヤさんにうち明けたのは、正しかったと思います」

「ぼくを信じて話してくれたヨル君こそ優しいでしょう。ありがとう」

ありがとう……意外すぎる言葉にほうけた。

「叔父の死とか、ゲイとか……面倒な話をされて、礼なんて、普通言いませんよ。優しいのはセイヤさんです」

友だちも、叔父という若干距離感のある親族でさえ死をちらつかせると苦々しい顔になる。あ

一亡くなったんだ……大変だな、若いのにな、と、とたんに暗澹としたようすで悼みを口にしながら同情しだす。だから申しわけなくなっ、うちに秘めるようになっていた。

「ゲイってことはそれ以前の問題で、当然言っていない。」

「言わずにいたってことはつまり、心をひらけずにいたってことでしょうか？ だけどヨル君はぼくを選んで心をひらいてくれた。それこそ初対面の得体の知れないおじさんなのに。純粹で、優しく、いい子だなと思うよ。そんなヨル君に信頼してもらえて恐縮です」

にこやかに、彼が軽く頭をさげる。

「……。セイヤさんは、じつは悪い人なんですか」

じっと探り見て訊ねたら、はは、と笑われた。

「悪い人は、自分が悪い人だなんてわざわざ教えないだろうね」

「じゃあいい人」

「いい人も、自分でいい人だとは言わないよ。そうだなあ……ヨル君の前では、きみが信じてくれたような優しい人でいたいね。一応、店長さんでもあるし」

「一応って」

ふふ、とセイヤさんが笑うから、つられてぼくもすこし笑った。

冷めてから食べるのも失礼だろうと、レンゲをとってお粥を口に入れる。大根と鶏肉とネギが入った味噌味のこのお粥もとてもおいしくて、身体の内側まで温めてくれる。

「……セイヤさん。成長って……なんですか」

「ん？」

「叔父に恥ずかしくない人間になるって、具体的にどうしたらいいのか」

三年経ってぼくは二十一になった。大学院へすすむ方向で将来についても考え始め、人生の岐路に立っているものの、いずれ博士課程を修了して就職活動も乗り越え、立派に働いていくのが恥ずかしくない人間……っていうわけじゃ、ない気がする。

「ヨル君の命の時計の針を、無駄にまわさないことかな」

「……無駄に」

「ヨル君はどうして叔父さんの名前をネットで検索したんだっけ」

「それは……」

それは。

「……また、叔父に、会いたかったからです」

聖也さんはいないけど、まだ生きている気がしてしかたがなかったから。消えなかったから。ぼくのなかでは死んでいないから。記憶の奥で、胸の底で、ずっと生きているから。

「でもきみは叔父さんじゃなくて、ぼくに会いにきてくれた」

「……。はい」

「ヨル君が自覚しているとおり、きみは三年間叔父さんに囚われていたんだらうね。ヨル君の心はおきざりのまま、時間だけがきみの目の前をさらさらすすんでた。けど、今夜新しい世界に踏みだしたわけだ。立ち止まっていたヨル君自身も、時間に乗ってまた動き始めた」

「はい」

「これもひとつの成長だと思うよ。ヨル君のペースでいい。隣で叔父さんが見ていても、心配させたり、哀しませたりしない生活を送れたらいいよね。叔父さんだけじゃなくて、ヨル君を大事に想っている人たちも心配だろうから」

……聖也さんを安心させるために、命の時間を無駄にせず、しっかりすすんで生きること。

「なら、ぼくはセイヤさんのお店に通います。それで、新しい恋を探します」

「恋は急かなくてもいいんじゃない？」

「いえ、叔父を安心させるには、やっぱりこの想いをべつのかたちへ昇華すべきだろうから」

「ん、んー……」

ニンジンをとって味噌ダレをつけ、ぽきぽき鳴らして食べた。セイヤさんは困ったような表情で苦笑している。

「間違っていないと思います。叔父は異性愛者で、結局のところぼくの気持ちを持ってあましていました。二十歳になっても、きつとつきあってはくれなかったはずですよ」

セイヤさんを困らせたいわけではないので、念を押して諭した。

「だとしても、ここは出会い系の店じゃないんだよ」

「あ、そうですね」

「たまたま知りあって、たまたま恋に落ちて結ばれるお客さんは稀にいるけども、血眼で男を漁られてもなあ……」

「しずかにそっと探します」

「ははは。面白いなヨル君……真面目なんだか天然なんだか」

くっく、と笑いながらトマトのまるごと煮もくれた。挽き肉がつまった大きな赤いトマト。

「ヨル君は、突然『あなたはゲイですか』って声かけたりしそうだよねえ……」

「そんな、大胆なこと、」

「じゃあどうやる？」

どう……。

「素敵な人がいたら、隣に座って……会話を、盗み聞きして、性格もよさそうな人かどうか、慎重に判断して……それで、店のなかだとあれなので、相手が退店するタイミングで、自分もでて、あとをつけて……？」

「ストーカーだよな」

ははは、と笑われて、ぐうの音もでない。ナンパ経験もないうえに、お店でほかのお客さんにスマートに話しかけるスキルも持ちあわせてはいない。

「まあ店内でならぼくもサポートしてあげられるだろうけど……しばらくは『アニパー』でも親睦を深めつつ、一緒にヨル君の恋人を探してみようか」

「え……それ、セイヤさんになんのメリットもないじゃないですか。ぼくが一方的に頼って、お店のお仕事以外の時間まで、割いてもらって」

「メリットか」

細長い指を扱いつらそうにタオルで拭いて、セイヤさんがにこりと微笑んでいる。

「じゃあヨル君のことを、ぼくのブログに書かせてくれないかな」

彼の文章で描かれる、彼の人生の物語のなかで、自分がひととき登場人物のひとりになる。
「……わかりました。かまわないです」
ぼくにはそれも、得しているのは自分のほうじゃないかと感じられた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>